

[第12回学術集会会長講演]

家族看護実践の展開—文化や社会に焦点を当てて—

千葉大学

石垣 和子

I. 日本における家族看護の進展と、独自の理論構築の可能性

今回で日本家族看護学会の学術集会は12回目となり、この間に家族看護学の教育や研究は何度か取り上げられ、外来語である家族看護学への馴染みやイメージ化・家族看護理論の理解は進んできた。一方、家族看護実践活動は、日本でもそう名づけられてはいなかった時代から経験的に積み上げられてきている。母性看護や小児看護の領域や、地域看護の領域においては歴史的に家族への視点が不可欠であった。他の看護においても大なり小なり然りである。しかし、家族看護学が明確になってきた今日、以前からの実践をこの家族看護学に照らして新たに整理し、説明付けることを行なうような傾向も見られる。実践経験そのものは豊富ではあるが、理論化することはこれまであまり行なわれてこなかった日本の家族看護において、今足元で行なわれている日本での実践を、輸入した理論ばかりと対比するのではなく、その実践方法を最初から組み立てなおして示す努力も必要と考えている。

そこで、今回の学術集会では身近な家族看護の実践の展開に注目する。実践の展開に当たって、そこに存在するヒト(すなわち対象者・看護職者)を覆い包む環境そのものである文化や社会に焦点を当てて捉えることによって、実践者の考えや感性が、文化や社会からの絶え間ない影響下においてどのように形成・修飾・再構築されているかを思い起こし、それから一步離れた職業人足りうるのか、の私案を提供したいと思っている。

II. 理論化の入り口としての実践の見つめなおし

家族というものは看護の対象の中でも特に奥深い側面がある。人間は複雑系であるといわれるが、家族では複数の人間が強い感情で結びつきあい、その強い感情の背景には一人一人の生い立ち、人生の出来事、社会的立場や社会から受ける影響があるという具合に、分解するのはなかなか困難であり、その総和の落ち着きどころを読み取ることは大変難しい。しかし、看護職者は以前から試行錯誤的に家族看護実践に果敢に挑戦してきた。先人たちの実践内容には大変すばらしいものがあるが、そこにおいては家族ごとの文化的文脈や社会システムからの影響はどのように対処されてきたのであろうか。文化的文脈や社会からの影響への何らかの直感や大まかな掴みが頼りだったのかも知れない。

大変大雑把ではあるが、これが実践の入り口ではないだろうか。何らかの直感が働かなくては何も始まらない。他人に説明できない直感や大まかな掴みが対象の状況にフィットするかどうか、その後の実践の展開に大きく響くことになる。であるから、これを説明できないものとしてあきらめるのではなく、ある程度ひも解いて知識化しておくことが、誰もが ある程度のレベルの実践に到達することに役立つのではないかと考えている。

III. 家族看護実践の展開の開始

家族は、看護職者は病人のためにいると通常は思っており、自らが看護職者のケアの対象になっているとは思っていない場合が多い¹⁾。家族に関心を

向けるとき、こちらの関心を素直に認めてもらうには、看護職者が豊かな感性と節度ある職業意識を持っているかどうかは重要である。では、看護者は、どのようにしたら家族員あるいは家族に内包される課題への感性を高め、家族との関係形成・維持の方略を、時々刻々の変化に添って見つけられるようになるのであろうか。以降は必ずしも家族に特化したことではないが、家族への感性を高めるためにも必要と思われる考え方を述べる。

IV. 文化的多様性と家族看護

科学的に解明された身体的機序が背景にあるような疾病と違い、家族の抱える問題はその機序も明確ではなく、その解決方法の正解もない。家族の抱える問題は、それぞれの考え方や受け止め方が違えば大きな問題にもなるし、取るに足らない問題に過ぎないことにもなるような性格も秘めている。看護職者の家族というものに抱く価値と、出会った家族の家族に対する価値が大きく異なり、それに気づかず良かれと考えて看護者が介入することにより、要らぬ波風を立てることにもなる。逆に看護者が鈍感で重大な問題を見過ごしてしまうこともありうる。

このことが最初から予測されうるのが異なる民族に相対するときなどであり、レイニンガーの看護論などに丁寧に書かれている²⁾。そこには、異なる文化については emic な見方（つまり人々を基盤にした見方）から発見し、etic な見方（つまり専門的な見方）から研究する必要があると書かれている。このことは地球規模で考える場合には大変わかりやすいが、日本での家族看護ではどうであろうか。家族体験は個性が高く、一見同質な文化内においても多様性が認められ、尊重する必要性があるのではないだろうか。

V. 外国の教科書に見る日本の家族とは…

アメリカの異文化看護についての教科書を開く

と、以下のような日本の家族に対する見方が書かれている³⁾。

- ・ 家族の中の主要な関係は母と子、特に母と息子であり、10歳くらいまで母と子は一緒に寝る。
- ・ 子どもは泣くことを許されず、すぐ抱き上げられる。
- ・ 体罰は容認される。家族の主たる関心は子どもの教育で、それは母親の役割である。
- ・ 子どもは勉強するように育てられ、最善の努力を強いられ、よきグループメンバーたることを教えられる。相互に配慮するように教えられる。自己表現には価値を置かない。
- ・ 妻は夫の世話をよくする。夫は日々の雑事はできないものと思われている。日本人の高齢者への義務感と、高齢者にコミットすることへの意識に注意せよ。

(文献3)の抜粋より筆者訳)

家族看護実践に当たって、これでは概略は当たらずとも遠からずの面もあるが、日本の家族看護の場面ではあまり役に立たず、実際はもっと詳細な個性への配慮が払われねばならない。

VI. 多様な家族の現実と家族に関する etic な知識の折り合い

看護者は、体験を伴わない単なる知識も含めた etic な知識を、多様な家族の現実とどのように折り合いをつけるのであろうか。ここで、文化人類学的方法から得られた知識と認知科学的な考え方を紹介する。前者は、異文化理解のための方法と知識であり、この場合、看護者自身の家族経験と対象家族の経験の違いを【異文化】と捉えたいと考える。後者は、人間行動を説明する根拠の解明の進歩によるものであり、遺伝子レベル、ニューロンレベル、もっとマクロなレベルで考えられてきた。

VII. 文化人類学的な異文化理解

まず、文化をどういうものと規定しているかについて以下に示す⁴⁾。

- ◆知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習、その他社会の一員としての人間によって獲得された能力や習慣を包含する複合的全体 E.B. Tylor,
- ◆人間の行動様式を形づくり、維持していく環境そのもの Skinner, 1972
- ◆学ぶことによって習得するものであり、人から人へ伝えられるものであるが、遺伝する性質のものではない Kroeber, 1948
- ◆人の行動様式を規定したり、人と人との間に起こるコミュニケーションの方法を規定したりする価値観や規範から出来上がっている Parsons et al., 1951

表現は様々であるが、文化人類学ではこれらについて、①五感ですぐ感じられる「かたちあるもの」だけで構成されているわけではない、②「考え方」「信念」「信仰」という無形のものもある、③無形のものは、現地の人といえども全て意識化・言語化できるわけではない、という点に注目している。

また、ヒトは自分の目で見ていると信じ込んでいるが、その目には文化というフィルターが取り付けられており、その事実を知ることが客観視につながるとしている⁵⁾。その点で「自文化中心主義と文化相対主義 ethnocentrism と cultural relativism」を取り上げ、自文化中心主義を、自分の慣れ親しんできた見かただけで異文化の現象を解釈したり、自分の価値観だけで善悪の判断を下す姿勢として極力排除し、相対的な見方で対象を捉えることを薦めている⁶⁾。

家族看護実践において、対象を「知る」という行為は、「知ろうとする」者（看護者）と「知られる」「発見される」者（家族）によって成立している。とすれば、文化人類学が西洋文化からの他文化を知ろう

とする行為が原動力となったことと同様に、知ろうとする側に無意識に心的優位感があることが危惧される。さらにこの際に、自文化中心主義が働くで一層まずいわけである。看護者は、知ろうとする者は優越関係に陥りやすいという自覚の必要性があり、「知る」ではなく「学ぶ」という語を思い浮かべる必要があると考えられる。そして、理解の一步は新鮮な驚きを持ち、興味を膨らませることであり、「それが事実だ」の段階にとどまることは「理解の停止」となることから、事実の背景やその発生機序まで踏み込んで「理解」に至ることが必要である。

文化人類学では、最初は新鮮に感じてみだんだん好き嫌い、善し悪しの感情が起こる場合があることや、一方で自我を殺して無反省に異文化を許容するというのではなく、自己の感情の内面と付き合うことを行なうことが大切としている。また、フィールドワークは異文化を理解するだけのものでなく、自文化に縛られた、自分の内面の、意識もしていなかった壁に気づきそれを乗り越えようとする作業でもあることが示されている⁷⁾。このことは看護、とりわけ家族看護にはよく当てはまることであることではないだろうか。

VIII. 認知科学的な人間行動の理解

人間と人間のコミュニケーション行動は、歴史的にいろいろな説明がされてきた。態度変容理論 (Attitude Change Theory)、帰属理論 (Attribution Theory)、不確実性減少理論 (Uncertainty Reduction Theory)、ソーシャルペネトレーション理論などである。さらに、人間行動を理解する理論として、近年注目されているのがスキーマ理論である⁸⁾。スキーマの起源はドイツの哲学者カントにさかのぼる。カントは人間の体験は脳の中に記憶として集められ、高位の概念を形成すると示したが、この高位の概念がスキーマである。その後いろいろな研究者によって人間行動研究に導入された。

図1は筆者がスキーマをイメージ化して示した

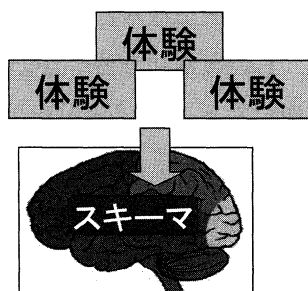


図 1

表 1

機能	内容
選択	スキーマに合った情報に目を向ける 聞きなれない固有名詞や親しみのない細かい点は記憶されない
解釈	自分なりに辻褄が合うように再構成して受け入れる
統合・抽象化	似通った事実や情報を統合して一つのスキーマを形成する
精緻化	与えられた情報が完全でない場合、欠落をスキーマによって補うことができる 誤りを指摘できる
同化	新たな情報を同化する・同化によりスキーマ自体が変化する
予知	どのような行動が続くか予知する 行動の結果を予測する 同じ失敗を回避する
効率	似たような物事や出来事をカテゴリーごとに分類する 記憶容量、取り出し方の効率化

ものである。スキーマは、状況や行動ルールについての情報、自分自身や周りの人についての情報、実際に起こった事柄や、物事についての情報、自己が獲得した方略、情動についての知識、これらの情報や知識の間の関係、などを含む組織化された認知構造であるとされている。体験があればスキーマが形成されるのであるから、看護者も家族員も皆経験からなるスキーマを持っているわけである。当然ながら、専門家として養成される間に教育されたこと、刷り込まれたことも“体験”である。

スキーマの機能には表1のようなものがあると考えられている。スキーマの種類もいろいろあり、表2にて示す。

体験が脳の中に概念として形成されていくということは、スキーマの中に社会や文化的文脈がその中に織り込まれていくことは避けられないこととなる。人間はスキーマを形成する際、以下のいずれかの

表 2

種類	内容
事実／概念スキーマ	「地球は丸い」など
人スキーマ	人についての情報を含むスキーマ
自己スキーマ	自分自身について認知的に一般化されたもの、自己概念形成にかかわっている
役割スキーマ	ある社会における、ある特定の地位の人に期待される行動や規範についての知識構造
状況スキーマ	よく遭遇する状況について、状況、含まれる人、行動などが一般化されたもの
手続きスキーマ	よく遭遇する状況において、どのような順序で出来事が流れていくかの情報を含むもの；目的を達成するために必要な階層的行動群から形成されている
方略スキーマ	推理、推論、類推、分類など、問題解決のための様々な方略についてのスキーマ
情動スキーマ	感情の高まりを経験する状況における行動

ある事柄に関する【看護者のスキーマ】と【家族のスキーマ】は、両者の交流を通じて相互に変容してゆく
⇒ 理解が深まる 認識が近づく

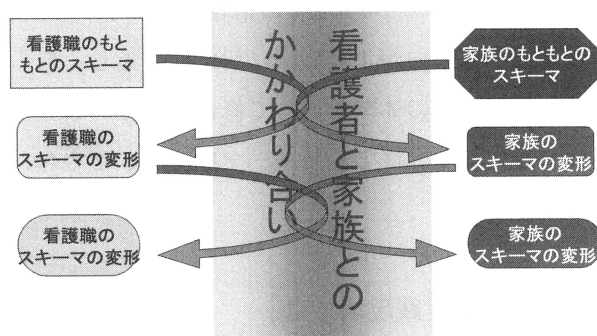


図 2

情報処理方法を用いる。

①スキーマに適合する情報はそのスキーマを通して処理される。

②あいまいな情報の場合には、情報を完全なものにしようとして、適切な情報収集をする。

③欠落している情報に既存のスキーマから妥当な情報を当てはめて理解しようとする。

①はスキーマ推進型、②はデータ推進型である。初対面など情報が不足しているときは、データ推進型にせざるを得ない。すなわち、情報収集が不確実性の減少に結びつく。また、異文化を持つ相手の場合、文化スキーマに基づいた相手の行動を個人の性格特性と誤る危険性がある（逆もある）。

ステレオタイプ・偏見を保持している者が関係ある情報に触れると、そのステレオタイプが活性化する(スキーマ機能の「選択」に該当)。ステレオタイプはデータの符号化(記憶システムへの布置)を助ける(「解釈」に該当)。ステレオタイプはデータの記憶システムからの取り出しを助ける(「選択」に該当)。そのようにして、ステレオタイプは認知エネルギーを節約する(「効率」に該当)という意味で決して否定すべきものとはいえない。しかし看護者が感性を高めるためには、情報処理の効率のよいスキーマ推進型の情報処理より、データ推進型の情報処理が適切であると思われる。これはスキーマ理論のもとに考えなくても、従来から言われていることと重なるが、スキーマを用いた認知科学的方法で理解することによって納得しやすいのではないかと考える。図2に示すように、データ推進型の情報処理によって、看護者は能率は悪いがより厳密に対象に接近し、自らのスキーマはその体験を通じて修正される。家族もそれに対応して、持てるスキーマを変形させるわけである。

IX. 家族看護実践現場では…

看護職者が家族と出会うとき、家族だけでなく、看護職者も文化的文脈の中で生きていることに気づかされることが多くある。

たとえば、想像を超える価値観、生活様式の家族に出会うとする。見知らぬ家族との出会いは、洞察と観察そして言語的コミュニケーションなどで文脈を理解しなければ受け止められないであろう。逆にそうしなければ理解できない自分の文化的文脈にも看護職者は気づく。それはとりも直さず看護職者のそれまでの文化的文脈の反映である。全く想像もすらないのだから。すなわち、知らない、わからない、異なるという気持ちの芽生えが相手に対する関心を抱かせ、それが理解に向かう作業の起点となる。

その源を認知科学的に探るとスキーマに突き当たるわけである。普段は便利で効率的なスキーマ推進型で情報を処理すると、知らない、わからない、異なるという気持ちを見捨てて無理にスキーマに適合させてしまう結果になる。看護の気づきに必要な感性と回転の速い効率的なデータの取り込みは裏腹の関係にあり、看護実践において、特に最初の関係性を高める段階ではこの点に留意する必要がある。

日本は文化的に均一の社会であるといわれる傾向があるが、それは西欧から見た大きなくりの文化であって、看護者が問題にする文化的文脈における文化は、もっときめ細やかな人々の気持ちの機微に分け入るような類のものである。そのような観点からは、ぼんやりと油断して対象を眺めていては気づくことができない微小な差異に気づくことが大切なこととなる。すべてが想定される範囲内と不遜にも考えてしまうことは避けねばならないであろう。次には気づいた差異を相互の文化的文脈や、社会的条件に照らして相対化することが必要になる。

このように、看護職は家族に抱く自感情を自ら客観視しながら真実の家族の姿を求めることが重要で、そこからかわりが始まると考えている。

文 献

- 1) 石垣和子：家族看護における調整機能，野嶋佐由美・鈴木和子編，家族看護学，P 64，建はく社，2005
- 2) 稲岡文昭監訳：レイニンガー看護論—文化ケアの多様性と普遍性—，医学書院，1995
- 3) CUL
- 4) 西田ひろ子：人間の行動原理に基づいた異文化間コミュニケーション，P 7，創元社，2003
- 5) 斗鬼正一：目からウロコの文化人類学入門，P 58，ミネルヴァ書房，2003
- 6) 住原則也他：異文化の学び方・描き方，P 32，世界思想社，2004
- 7) 住原則也他：異文化の学び方・描き方，P 135—9，世界思想社，2004
- 8) 西田ひろ子：人間の行動原理に基づいた異文化間コミュニケーション，P 83—106，創元社，2003